



四日市看護医療大学

四日市看護医療大学学報 No.14

[発行日]令和2年12月21日 [発行]四日市看護医療大学 庶務課

〒512-8045 三重県四日市市萱生町1200 TEL.059-340-0700 FAX.059-361-1401 <https://www.y-nm.ac.jp/>



看護医療学部教員対談

今年度より臨床検査学科が新設され、学部名称も看護医療学部へと変更になりました。そこで今回の学報では、特別企画として両学科の新任教員座談会を実施し、その時の様子を掲載することとしました。

司会：入職されて半年ほどたちましたが、本学に対してどのような印象をお持ちになったか教えてください。

松田：もともと特に大きなイメージはなかったです。今回、特に新型コロナウイルスの影響で、前期は大学に学生がいなかったもので、ようやく学内に学生が戻ってきて、これが本来の学校の雰囲気なんだと学校のイメージが付いてきたところです。元氣よく学生がしゃべってる姿を見ると、学校として楽しい雰囲気が戻ってきて良かったなと感じています。温かみのあるじゅうたんとか建物は、光が入っているので、温かい雰囲気だなと思っています。



看護学科
松田 陽子 先生

鈴木：私も本校の校舎が太陽の光をたくさん取り込む構造になっているので、松田先生同様明るい印象を持ちました。また、学生の皆さんも、自由で明るい印象を受けます。前職は専門学校に勤務しておりましたが、医療従事者を目指す学生として、身だしなみに関する規則が厳しかったので、学生は縛られている感じがしました。本校の看護学科も含めて何人かの先生方に、学生はそれぞれ自覚をもっているので、臨地実習に行く頃になると自然と身だしなみを整えるようになる。学生を信じることも大事だというお話をしてもらいました。規則で縛るのではなく、教員が学生を信じていることが、学生の明るさにつながっているのだと、こちらに着任して学ばせていただいたと思っています。

司会：実際に学生達と関わって見た感想はいかがでしょう？

松田：臨床検査学科の1年生は、講義で一部関わらせてもらいました。看護学科は主に2年生から4年生に講義をしています。皆さん明るく、元氣がいいですね。看護の質問を結構してくれるので、「一生懸命、意欲的な」という印象もあります。

司会：臨床検査学科は1学年だけで、先輩もいないため戸惑いもあるかと思います。学生の皆さんの様子を教えてください。

鈴木：1年生なので先輩がいない面では、学生は不安もあったのかもかもしれませんが、その対応として担任の教員が4名ついております。後期から登学していますが、先生方と関わる中で、不安が払拭され、学生生活を楽しんでいるように感じます。担任の先生方が皆とても面倒見がよい先生方なんです。学生が信頼しているのも伝わってきます。とても良い関係が構築され

ていると思っています。

学生の印象は、向上心が高い学生が多いと感じますね。選抜制の細胞検査士を目指している学生が多いことも、その理由かもしれません。前向きで目的意識を持った学生が多く、私自身刺激されています。

司会：新型コロナウイルスの影響で、4月の段階では授業自体、ほぼリモート形式でした。後期からは、対面形式も増えてきましたが、看護学科、臨床検査学科、これまでそれぞれどのように対応、活動されてきたか、お伺いしたいと思います。

鈴木：学科としては先ほどもお話ししたように、担任の先生方を中心に、イレギュラーな状況なので手厚く対応をしていました。新入生で右も左もわからない中、リモートという授業体系になってしまい、医療分野の勉強は難しく、勉強方法もわからず、登校してないのでクラスメイトに相談することもできない中、課題提出があるなど、学生もとても不安だったと思います。そのような中、学生とコンタクトをとって、課題の進捗を確認するなどして対応していました。学生も安心したと思います。



臨床検査学科
鈴木 真紀子 先生

私個人では、今回初めてのリモートの講義だったので、事前準備に全集中しました。言葉に詰まれば学生はリモートなので聞きづらいうちで、3回以上シミュレーションしたり、またアニメーションを使って視覚に訴えるなど、リモートでも対面同様の理解を促すべく工夫しました。自身の授業を0から見直す良い機会になったと思っています。

松田：今回、コロナ禍があって、看護は人との関わりの中で援助を学ぶので、学修するうえで、直接、人と人が関われない環境で学ぶのを深めていく難しさを、すごく感じました。でも、そういう中でも、今までやってきた方法とは別のゼロベースで、どういう学修スタイルを用いていったらいいのかと考えるきっかけになったと思います。

司会：オンライン授業の中で工夫された部分、学修効果を感じた所はありますか？

鈴木：授業毎に課題を出す中で、学生が質問できるスペースを設けました。そのため学生が授業にどう感じているかを知ることが出来ました。授業を工夫した分、「分かりにくいところはなかっ

た。」という意見が多く、手応えは感じる事が出来ました。また、授業終了後にアンケートを取りましたが、その中で「対面ですりやらかった。」という意見がほとんどでした。登校したいという意欲は嬉しく感じました。

松田：遠隔の授業でも大事なポイントは、ちゃんと学んでくれているなという実感はあります。遠隔のいいところは、質問を打ち込めることですね。普段、対面でする授業よりも、ちょっと分からないとことか、気になるときは、ダイレクトに届いて、「あ、ここが今、伝わってないな」とか、「ここ、分かんなかったんだな」というのが、直接、吸収しやすかったです。でも、学生同士が集まって一緒に空間を共有できる機会は少なかつたかもしれません。

司会：それぞれ看護師、臨床検査技師になろうと思われたきっかけ、または、影響された人物について教えてください。

松田：私が看護師になろうと思ったきっかけは、自分の妹が身体障がい者で、身体が不自由なところがあって。障がいがありながら疾患がある人を支える看護師という、一番近くで患者さんを見られる仕事を選択しました。精神看護は、まだまだ治療法とか、正確な原因が分かっていないところがあって、看護自体も手探りでやってたところがあったので、「ちゃんとした根拠を持った、精神看護って何だろう」と、もうちょっと自分も勉強して、いろんな人に魅力も含めて伝えていけるといいなと思い、選択しました。

鈴木：小学生の頃から医療専門職には興味や憧れがありました。実際に臨床検査技師を目指すきっかけとなったのは血液型でした。私自身がRh マイナスなんです。なぜ200人に1人なのか、何が違うのかという事に興味をもって調べるうちに、臨床検査技師という職業を知り目指すようになりました。実際は、医師や看護師と比較すると地味な印象があり、迷いがありましたが、実際に現場で働いてみると違いました。毎日新しいことの発見がありルーチンではなかったことも印象的でした。「検体を扱っていても、検体の裏側にある患者さんに心を馳せて検査しなければならぬ」という教えは今でも私の原点です。仕事をしていく中で、がんの早期発見に貢献できることもあるなど、責任は重いですがやりがいのある魅力ある仕事です。教員を目指したのは、大学3年生の時に会った先生がきっかけです。とても熱心な先生がいて、その姿勢に感銘を受けました。それが今に繋がっています。魅力的な仕事だと感じている臨床検査技師の後進を育てることに、尽力できる仕事につかせてもらっていることが本当に幸せだと感じています。

司会：今後、実施予定となっている看護・臨床検査学科のジョイント授業について教えてください。

鈴木：臨床検査学科の学生が3年次に、看護学科の学生と検査学科の学生で合同授業を行う予定があります。高崎学科長が多職種連携教育を実現したいという強い思いを持っており、看護学科の先生方も賛同してくださっています。各学科複数名でグループを作り、1つの症例をディスカッションするというものです。別の視点からの議論になるので、非常に面白いと思っています。こんな考え方や見方があるんだと、意見交換する中で視野が広がりますし、相互の職業理解にもつながると思います。臨床検査学科の学生は看護学科の学生の協調性やコミュニケーション能力の高さに触れ、奮起するのではないかといい点でも期待しています。

松田：そういう取り組みができるのが本学の強みであり、面白いですよね。

司会：最後に、学生の皆さんへメッセージをお願いします。

松田：看護の学修は、すごく専門的になってきて、試験とか実習とか自分を乗り越えなきゃいけない大変なところもあるかもしれないです。でも、そういった経験を通して、知らぬ間に自分が成長したなと感じると思います。勉強や患者さん・グループメンバー・いろんな人との関わりを通じて、考え方や行動、自分の枠を取り払って、いろんなことをどんどん自分で吸収して、成長して行ってほしいなと思ってます。それができる、面白い分野かなと感じてます。

鈴木：臨床検査技師も、松田先生が言われたように看護師も、とても幅広い領域を持つ職業なので、「絶対やりたい」と思える、興味を持てる分野があるはずなんです。自身の間口を広げて、好きなもの、興味のあるものを見つけて、そのためにアンテナを高くして、積極的に好奇心を持って行動してほしいです。勉強は、やりたいことが見つければ、自ら必死になると思います。私が教員を目指すようになってから変わったように、目指す未来を手に入れるためのサポートは、私たち教員が全力でします。

司会：今日は、どうもありがとうございました。

「対談時は感染症予防対策をとりマスクを着用しております。」

令和2年度 入学式

4月2日(木)に予定しておりました令和2年度本学入学式は、新型コロナウイルス感染症の影響により、中止となりました。また、新学期のオリエンテーション他イベントについても大幅な変更を余儀なくされる異例の4月となってしまいました。

新入生および保護者の皆さまのお気持ちを察しますと、誠に遺憾ではございますが、本学教職員一同祝意を示すとともに、これからの学生生活を全力でサポートしてまいります。

教員からのメッセージ



在宅看護学 講師
春名 誠美

令和2年9月14日より、3年生の領域別看護学実習が始まりました。今年は未曾有のコロナ禍によって、遠隔・学内・臨地を組み合わせた複合流動的な実習体制となりました。

在宅看護学では、臨地のご協力で限られた条件ではありますが、経験学修が可能となりました。訪問看護ステーションで実際の情報に触れながら、訪問看護師と共に同行訪問させていただきます。

学生は、初めて何うお宅に緊張はマックスです！しかし、訪問を受け入れてくださった療養者さんご家族に感謝しながら、現場でのケアを通し様々なことを学んでいきます。緊張感の中で、迷ったり悩んだりしながら看護の基本に気づいていきます。そして在宅実習最終日には、初日とは全く違う笑顔で、ちょっぴり自信をつけた学生たちが次の領域へと元気に実習を進めていきます。

看護を目指す学生らにとって現場の経験は大きな学びであり、喜びです。全領域の臨地実習が可能となることを願うばかりです。

6月20日(土) 教育後援会について

平素は本学の教育後援会活動に格別のご理解とご協力をいただき、厚くお礼申し上げます。

令和2年度教育後援会について、新型コロナウイルス感染症の影響により、大学での総会開催は控え、役員会のみ集合形式で実施いたしました。役員会では、令和元年度事業報告および決算報告、令和2年度役員(案)、事業計画および予算(案)が提案され、総会においては書面の決議を行うことで承認されました。その後、大学側から、国家試験、就職状況、クラブ等、新型コロナウイルス感染症における本学の対応状況について報告させて頂き、ご理



解頂きました。

最後に丸山学長より、今後の対面授業や図書館開館等の大学対応について、学生の安全を第一に、感染症の動向を注視しながら慎重に対応を図っていく旨の説明を行いました。

令和2年度 「保護者懇談会」について

10月3日(土)教育後援会主催の保護者懇談会を開催いたしました。

会員皆様のご支援により73名の方に参加頂きました。この場を借りて教職員一同、深く御礼申し上げます。

当日の全体説明会では、教育後援会会長田中様の開会挨拶から始まり、大学側として丸山学長の挨拶、水野副学長より後学期からの授業について、豊田看護学科長、高崎臨床検査学科長より本学の教育の取り組みや学生生活状況について説明させて頂きました。保護者様から、臨地実習や対面授業及び遠隔授業、国家試験等について質問があり、大学側からご説明させて頂きました。

その後、面談会場に移動し、アドバイザー担当教員等との個別面談を実施しました。1組15分程度の面談ではありましたが、ご



子弟の学生生活の状況等を知っていただくいい機会になったと思います。

今年度は、コロナ禍にあり、多様な授業形態の中、全体説明会や個人面談等で多くのご意見を頂戴いたしました。お預かりしたご意見を集約し、すみやかに学生支援等ができるよう、教職員一同より一層精進してまいりたいと思います。引き続きご支援、ご指導の程、宜しくお願い申し上げます。

本学の社会貢献活動について

今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、例年実施している公開講座および高齢者向け生涯学習プログラムについては中止となりました。

そのような中、予約申し込み制、定員を従来の半分とするなど万全の対策を実施した上で、令和2年8月4日に三重県総合文化センターにて実施された「みえアカデミックセミナー」へ参加をいたしました。

※「みえアカデミックセミナー」とは県内の大学・短大・高専・放送大学を含めた高等教育機関との連携で生まれた公開セミナーです。各高等教育機関それぞれが講師を派遣し、毎回多くの参加者が集まるイベントとなっております。

本学からは、看護学科教授柿原加代子先生が担当となり、「コミュニケーション力をアップし、豊かな生活と自己成長をめざす」をテーマに講義をいたしました。

講義内容は、コミュニケーション自体の概論を基調としながら、

その意味、技法について幅広く語られました。

その中でも特に、「受容」、「傾聴」、「共感」については、講義終了後のアンケート内でも多くの感想をいただき、受講生の皆さまに日々の暮らしの中でのコミュニケーションの大切さを改めて感じていただけたのではないかと思います。

社会貢献活動に関して本学では、今後も地域の皆様に寄り添う中でコンテンツを充実させ、様々なニーズにお応えできるよう努めていきたいと存じます。



オープンキャンパス



今年度のオープンキャンパスが、7月18日(土)、8月9日(日)、8月23日(日)に行われました。今年受験を控えている高校3年生、既卒生の方に限定し、学科ごとに定員制を設けるなど様々な新型コロナウイルス感染症対策を講じて行われました。定員制での実施としたため、より志望度の高い参加者が多く見受けられました。

当日の内容として、両学科ともに副学長の挨拶から始まり、四日市市健康福祉部様から本学との公私協力体制や支援制度などについてお話をいただき、その後、大学概要、学科説明や入試説明、模擬講義や施設見学などを行いました。そして、実習体験や入試、奨学金などについて相談する個別相談コーナーを設け、熱心に質問する参加者で賑わっていました。

参加された方の声をお聞きすると、今後の進路実現に向けて有意義な機会の提供になったと思われます。

教職研修の活動について

● ハラスメント対策委員会

ハラスメント対策委員会委員長 二村 良子

ハラスメント対策委員会では、あらゆるハラスメント防止対策に努めるために、パンフレットや本学ホームページへの掲載による啓発活動や研修等を行っています。

研修は、毎年1回、教職員に対して行っていましたが、本年度は、コロナ禍の影響で開催を延期しています。そこで、オンラインで Staff Development(SD：以下 SD 研修)のセミナー「大学におけるハラスメント防止セミナー」が7月に開催され、ハラスメント対策委員会のメンバーが参加しまし

た。チェックリストやケーススタディに基づいてグループディスカッションを行い、ハラスメントの特徴や防止についてわかりやすく学修する参加型の内容となっていました。

ハラスメントについてはわかっている、繰り返しハラスメントに関して自分の行動を見直すことが大切です。したがって、ハラスメント対策委員会では、学生、教職員に対して、ハラスメントの防止・対策のために、関心をもって学んでいけるよう、工夫した内容での研修会を開催します。

このような継続した対策によりハラスメントのない学修環境を学生・大学院生に提供していきます。

● 教職員研修

事務局長 室町 律雄

本学では、大学職員としての能力の向上とともに、社会人としての資質向上を図るため、学内・学外の研修等を通じてその取組を進めています。

研修は、大学を取り巻く厳しい状況に対応していくため、知識の積み上げだけでなく、高等教育を取り巻く状況を分析する能力や経営思考、企画能力など、大学人として求められる能力の養成を目指すとともに、改革意識を促すものと

位置づけています。

2020年度、事務職員においては、新任管理職にマネジメントの資質を養うための研修やコロナ禍においてオンラインの活用による研修参加に取り組み、教員においては、四日市医師会長をお招きし地域安全医療についての研修を予定しています。また、12月には教職員を対象とし三重県下の私立大学合同での研修を予定しています

参加型研修の開催中止が相次ぐ中、オンラインによる研修を積極的に活用しながら、教職員の能力と資質の維持・向上に努め、良好な教育環境を整えていく所存です。

CNS

専門看護師

コースの

教育課程

について

大学院看護学研究科には平成23年の開設以来、CNS（専門看護師）コースの教育課程が設けられています。現在までCNSコースを修了し、専門看護師の資格を取得された方々は救急医療の現場で重要な役割を担い、活躍をされています。

CNSとは日本看護協会が14の専門看護分野について認める資格であり、本学はクリティカルケア看護専攻で、急性・重症患者看護専門看護師を養成する課程となっています。開設当時は26単位の教育課程でしたが、医療技術の進歩やニーズの複雑化、看護に求められる専門性の拡大に伴い38単位の教育課程に移行が求められ、あらためて一般社団法人日本看護系大学協議会に認定を申請しているところです。

本大学院において、さらに高度な技術と知識をもった看護師が養成されることを期待しています。

看護学科

臨地実習について

今年度は、コロナ禍での出発となりました。特に、看護学教育のなかで重要な柱の一つである「臨地実習」が例年通り実施できるか、実施できなかった場合はどうするかなど、学内で頻りに会議を持ちました。文部科学省、厚生労働省からの通達や実習施設の状況など注視しながら検討し、4年生の統合実習、地域看護学実習、助産学実習、2年生の基礎看護学実習Ⅰは、学内・遠隔での展開となりました。9月以降、実習の受入をしてくださる施設もあり、4年生助産学実習、3年生の領域別実習の一部について、臨地での実習を行っております。

教員は、学内や遠隔での実習に際しても、従来の質を担保す

看護学科長 豊田 妙子

るための工夫を行っております。実習施設から写真や動画・遠隔での指導を受けたり、教員が患者役をしてロールプレイを実施したりしています。臨地に赴くことができなくとも、実習施設のご指導を受けることで既修の知識・技術の統合が可能となっております。実習という少人数教育だからこそ、柔軟にかつ臨機応変に対応してまいります。今後とも関係機関のみなさまのご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



看護学科 3年生
児玉 桃愛

私は最初の実習で介護老人保健施設へ行かせていただきました。ここでは、「利用者さんの暮らしの場」であるため、生き生きと毎日が過ごせるように多職種間の連携でサービスが提供されています。また、病院と施設の違いを学ぶことができました。施設では一緒に食事やリハビリをされていたので、利用者さん同士の交流があり、孤独感を感じることが少ないと思いました。

また、今回はコロナ感染防止のため、実習時間の短縮と遠隔で行いました。今までの実習とは異なる形態であったので不安や戸惑いがあったのですが、その分限られた時間で情報収集やアセスメントするスキルを身に付ける良い機会になったと思います。

看護実習
体験記

臨床検査学科

「逆境をプラスにとらえ、 世の中に貢献できる臨床検査技師を目指す」

臨床検査学科長 高崎 昭彦

「新型コロナウイルス感染拡大!」そのような状況の中、令和2年度前学期がスタートしました。この令和2年度は新学科「臨床検査学科」にとっては記念すべきスタートになるはずでした。新入生に対するガイダンスもままならず、4月当初は休講、その後は課題対応、手探り状態での「遠隔講義」開始とめまぐるしく変化する未曾有の事態に大学側も何とか対応してきました。学生の皆様も我々同様手探り状態で何とか頑張って対応していただき、前学期を終えることができました。いまだ完全終息は見えません。そのような中での後学期開始。ようやく制限付きの「対面講義開始」までに至っております。

本学科は次世代医療に対応できる臨床検査技師育成を目指し、看護・介護の知識、プラスαの民間資格取得、さらには細胞検査士とのダブルライセンスを目指し中部地区初の文部科学省指定校としてスタートしております。1期生はその学科特色を理解し、この逆境の中でも前向きに明るく元気に勉学に励んでおります。この事態もプラスにとらえ、不便の中での学習方法確立、教科書では学べない、「感染に関する検査」、「ウイルス、微生物学」など興味を持って学習しています。対面授業開始にあたり、大学として徹底した3密回避を実施しております。講義室も距離を開け着席するため、学生数の多い看護学科では教室確保に苦慮している状況です。医療には「チーム意識」も大切です。学生数の少ない本学科の講義は「実習室」で行い、教室確保に協力しています。本学科学生には不便を強いていますが、不満を漏らすことなく協力していただいています。この意識が将来「チーム医療」の推進に役立ってくれることを期待しています。

臨床検査学科1年生 仲谷 麻矢

前期は大学の同期に会えない中、慣れない様々なツールを利用し講義を受けました。不安を抱いていましたが、大学のサポートにより柔軟に対応することができました。先生方のご厚意により、Zoomを用いて同期との友好関係を築くことができました。また、講義で疑問に感じたことに対して先生方に質問メールを送ったこともあったのですが、その質問に対し、いつも細かく丁寧に対応していただきました。熱意のある先生方ばかりだと感じたと同時に、四日市看護医療大学に入学してよかったと思いました。後期は多くの科目が対面講義となり、実習も始まりました。対面講義・実習で前期にはスムーズに行えなかった先生方との質疑応答、同期との意見交換が容易にでき、楽しく学んでいます。また、サークル活動ができていません。サークルに入り、交友関係を広げ、様々なことに挑戦していきたいです。



学生支援体制 「遠隔授業を実施して」

副学長 水野 正延

新型コロナウイルス感染の拡大により、4月7日に緊急事態宣言が発出されて遠隔授業が目撃されましたが、「双方型」は公立学校の5%程度でした(4/25 中日新聞)。本学では学長を委員長とする危機管理委員会が2月に招集され、3つのチームが設置されました。学生生活に関するガイドラインを作成する感染対策チーム、遠隔授業の準備と運営を担当するチームです。5月連休明けより遠隔授業を実施することとなり、不安を訴える学生には学生生活委員会が対応し、危機管理委員会の下で3つのチームが中心となり、大学教育を支える体制を構築しました。

医療の基礎教育がface-to-faceでなくなることへの不安、疑問が教職員の胸中に渦巻く中、感染症の拡大に伴い文科省の通知も様々に変化します。当然であった対面授業が不可能になり、教育の本質とは何かを問われることになりました。教職員は情報を共有し、現在の状況で最大の教育効果を発揮できる方法論を工夫できたことは、大きな成果であったと思います。両学科、各部署、各委員会が連携し、暁学園綱領にある建学の精神「人間たれ」の教育を実現し学生へ提供したいと考えています。そのために教職員の挑戦は続きます。

学友会

学友会会長 山田 怜奈

学友会は2年生と1年生が中心となり、本学を盛り上げようと活動しています。主な活動内容は、新入生歓迎会、親睦運動会、大学祭の企画・運営です。今年度は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、例年通りの活動ができていない中ではありますが、B棟1階に学習スペースを作り9月14日に寄贈することができました。このスペースは、今年度開設されました臨床検査学科と看護学科の学生の勉強スペースであることはもちろん、本学の学生、卒業生、そして職員の方との交流の場となることを目的としています。



現在では後学期も始まり、少しずつですが活動も再開することができます。例年とは異なる形ではありますが、学生がより有意義な学生生活を送ることができるように、そして本学を盛り上げることができるよう学友会一同活動していきたいと考えております。

クラブ紹介 くれよん



「くれよん」は、障がいのある方々との交流を行っているサークルです。四日市市内の特別支援学校に通う子どもたちと遊んだり、学校行事にボランティアとして参加させてもらったりしています。また、幼児から成人まで幅広い年代の方が利用するNPO法人を訪問し、利用者さんと交流する活動も行っています。毎回異なるレクリエーションを企画しており、利用者さんも学生も楽しめる笑顔あふれる時間になっています。

今年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響で盛んに活動を行うことができず、さらに1年生の新しい仲間をなかなか迎えられないもどかしい期間を過ごしてきました。秋にようやく1年生13名を迎えることができ、メンバーは計42名となりました。新しい仲間たちとともに、これからも「くれよん」らしい笑顔あふれる楽しい交流を行っていきます。

教員学外活動 女子ラグビーについて

助手 杉本 七海

「多様性の結集」

私は、学外活動として真剣にラグビーに取り組んでいます。これまでに日本選手権・アジア選手権大会などに出場しました。社会人ラグビーでは18歳から40代の選手まで様々な背景を持つ選手がいます。個々の特性を活かし、役割を果たし、チームとしてトライを狙います。人が集まると意見が異なるのは自然なことです。



「異なる意見や立場の人間を一方向的に排除しないで、困難を伴うけれどもそれを承知しつつ、合意と納得によって、双方の利益のために先頭に立って行動する人間」

これは暁学園が育成を目指す人材像です。私は、このような人間たることがどれほど大切かを体で知っています。きっと看護医療の現場にも通ずることではないでしょうか。



高大連携について



令和2年度の暁高校との高大連携事業は、3年生27名(看護コース選択者)が6月24日に、2年生28名(希望者+看護医療コース選択者)が9月23日に来校して本学の講義に参加する形での大学講座体験となりました。

生徒達は体験中、大学の教員や在学生に指導を受け、和気あいあいとした雰囲気の中で、時に真剣に取り組み、楽しそうに学ばれていました。また、本学の教員が看護医療系の知識を高校での学びと関連付けて説明した際に、興味深そうに聞いている姿が印象的でした。

前年度まで2年生の高大連携事業は出張授業でしたが、今年度は3年生と同様に大学体験講座としました。この高大連携事業で、受験を控えた3年生だけでなく、低学年のうちから大学に来て学んでいただくことで、進路選択の幅を広げ、看護医療系の学びを深める機会となり、暁高校からの本学への進学、あるいは医療系養成校進学への意識向上につながるよう、今後も引き続き高大連携事業の改善を図っていきたく思います。

四日市看護医療大学
2019年度(2020年3月)卒業生

就職・進路状況

就職率
100%

4割が
公務員に!

2019年度卒業生はそれぞれの看護の道に羽ばたいていきました。看護学生を取り巻く就職環境は、年々、厳選採用、採用時期の早期化、短期決戦へと移行しており、本学学生においてもゴールデンウィークをピークに4月から6月までに65%が、7月には90%以上が内定を得る結果となりました。この時期、ゼミ講義、統合実習、国家試験対策等多忙を極める学生ですが、この流れに乗り遅れないよう、また、主体的な就職活動ができるよう、本学はアドバイザー教員を中心に全学的な体制で学生をサポートしています。

- ◆ **全体の4割が地方公務員**となり、独立法人化された準公務員なども含めると8割が何らかの公的医療機関に就職を果たしました。このことから依然として公務員や公的な職場への人気の根強さが窺えます。
- ◆ 地域別では、**地元三重県への就職者数が63%**となり、今年度も看護職の充足率が全国平均を大きく下回っている三重県や四日市市からの期待に応えることができました。
- ◆ **実習先病院には、44%が就職**しており、本学の教育と就職が密接に関わっていることを裏付ける結果となりました。

日本は、2025年には団塊の世代が全て75歳以上の高齢者となり、2040年には団塊ジュニア世代が65歳以上の高齢者となるなど、急速に高齢化が進んでいきます。2018年度の診療報酬改定※でもキーワードとなったのは、やはり「地域包括ケアシステムの構築」と「医療機能の分化・強化」。このことは看護師の採用や働き方にも密接に関わってきますので本学としても、今後の動向に注視しながら、適切な学生支援を展開していく所存です。

※診療報酬改定：医療機関の診療に対して保険から支払われる報酬の改定で2年毎に見直される

国家試験
合格率

- **看護師：99.2%** (受験者119名/合格者118名)
- **保健師：100%** (受験者48名/合格者48名)
- **助産師：100%** (受験者8名/合格者8名)



学生食堂再開について

新型コロナウイルス感染対策として、カウンター、コンビニレジ前に飛沫感染防止シートの設置、テーブルにはパーテーションを設けました。

メニューについてもお弁当を新たに用意する等テイクアウトを充実させております。

また、学生支援の一環として学食・コンビニで使用できるプレミアムチケットを販売したところ、大変ご好評をいただき予定枚数を完売いたしました。



2019年度 就職・進路状況 (2020年3月卒業生)

【内訳】

(単位：人、%)

卒業生		119
就職	就職希望者	118
	就職者	118
	就職率	100%

※就職希望者数は、卒業生のうち国家試験不合格者、就職意志のない者を除く。

都道府県	就職先	人数
三重県	市立四日市病院	30
	四日市羽津医療センター	5
	三重県立総合医療センター	14
	伊勢赤十字病院	6
	桑名市総合医療センター	2
	三重大学医学部附属病院	7
	三重病院	2
	市立伊勢総合病院	1
	松阪市民病院	1
	松阪中央総合病院	1
	藤田医科大学七栗記念病院	1
	白子ウィメンズホスピタル	1
	永井病院	1
	三重県(保健師)	1
	菟野町役場(保健師)	1
三重県 集計	74	
愛知県	愛知医科大学病院	1
	一宮市立市民病院	1
	海南病院	2
	公立陶生病院	1
	大同病院	1
	藤田医科大学ばんだね病院	2
	藤田医科大学病院	10
	八事病院	1
	名古屋セントラル病院	1
	名古屋市立西部医療センター	1
	名古屋大学医学部附属病院	2
	名古屋市立大学病院	3
	名古屋第一赤十字病院	6
	名古屋第二赤十字病院	2
	名城病院	1
北医療生活協同組合北病院	1	
愛知県 集計	36	
東京都	東京大学医学部附属病院	1
	板橋中央総合病院	2
	東部地域病院	1
東京都 集計	4	
神奈川県	湘南鎌倉総合病院	1
	川崎市立川崎病院	1
神奈川県 集計	2	
京都府	京都府立医科大学附属病院	1
長崎県	長崎みなとメディカルセンター	1
合計		118

海外研修

教授 ダニエル・カーク

四日市看護医療大学の海外研修は、カリフォルニア州立大学ロングビーチ校の2年生30名を対象とした2週間の学修体験です。

学生は、看護についての理解、英語に対する自信と能力、そしてお互いの関係を深めます。

参加者は、看護に関する講義に出席し、医療施設を訪問し、英語のクラスに出席します。

学生はお互いを知るようになります。すべての学生は2人部屋に住んでおり、すべての施設を他の学生と共有しています。

今年の海外研修がキャンセルされました。状況が改善され、生徒たちがこの豊かでやりがいのある経験を再び体験できるようになることを願っています。

令和元年度 看護学部・大学院卒業式

3月10日に予定されていた、令和元年度卒業式は、厚生労働省から発信された、イベント開催に関するメッセージに基づき、感染の広がり、会場の状況等、学生、保護者様及び教職員等の健康・安全面を考慮するとともに、感染拡大の防止という観点から開催を中止いたしました。

卒業生の皆さまが本学で学び培ったことを生かし、これからの新たな生活が希望に満ちたものになりますことを、教職員一同、心より祈念しています。

令和2年度宮崎徳子奨学金・長江拓子奨学金授与式

11月26日(木)、宮崎徳子奨学金および長江拓子奨学金授与式を開催しました。

宮崎徳子奨学金は、開学以来、学科長、学生支援センター長、学長補佐を歴任され、現在に至るまで本学の発展にご尽力いただいている宮崎徳子先生から頂戴したご寄付を基に創設された奨学金です。また、長江拓子奨学金は、本学で教鞭を取られた後、顧問としてお力添えをいただいた長江拓子先生から頂戴したご寄付を基に創設された奨学金です。

この二つの奨学金制度は、本学の学生がより一層学修意欲を高め、看護専門職業人となる自己の目標を明確にすることにより、人材の育成に資することを目的としています。

学業成績並びに本学及び社会への貢献等を審査し、宮崎徳子奨学金は4年生4名、3年生3名の計7名を、また、長江拓子奨学金は2年生1名を、それぞれ本年度の奨学生とすることを決定



いたしました。

授与式では、丸山学長から賞状と奨学金が授与され、宮崎先生からは激励のお言葉や長江先生の功績などをお伺いし、その後は記念撮影。今後、この奨学金を受給された皆さんの、更なるご活躍を期待します。

なお「河野啓子賞」表彰式は、来年2月に実施される予定です。

本年度 学位記授与式

令和3年3月10日(水) 四日市都ホテルにおいて挙行する予定です。

コラム

「ポストコロナ」時代に見えてきたもの

新型コロナウイルスに関する発表が厚生労働省のリリースに初めて登場したのは2020年1月6日のことでした。

目に見えないものに今までにない恐怖を感じ、さまざまな新しい習慣の流入など経験したことのない出来事が次々に私たちの身に起こりました。

「ポストコロナ」時代とはこれまでわたしたちが目に見えないものを疎かにしがちだったことへの警告のはじまりなのかもしれません。

サン＝テグジュペリの代表作「星の王子様」の一文にこうあります。

《とても簡単なことだ。ものごとはね、心で見なくてはよく見えない。いちばんたいせつなことは、目に見えない》と。

今こそ私たちは大切なものと真に向き合っているのかを問われているのだとしたら、「ポストコロナ」時代において、目には見えない自分の心と向き合い自分を見つめなおすことが「いちばんたいせつなこと」なのかもしれません。